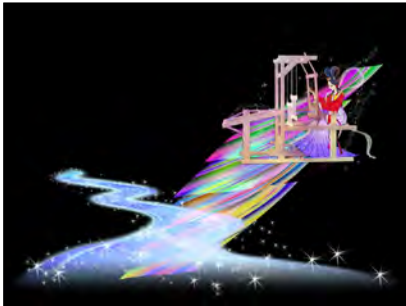


たなばた 七夕ものがたり

夏の夜空に、ぼうっと白く立ちのぼる天の川。
その天の川をはさんで光るふたつの星は、
一年に一度だけ、七月七日の夜に会うことをゆるされた、
織り姫と彦星の愛のあかしなのです。

(4分)



1.
昔むかし、天の川の西の岸に、美しい娘がいました。

天のみかどの娘で、名前を織り姫といたしました。



いつもせっせと牛の世話をしています。



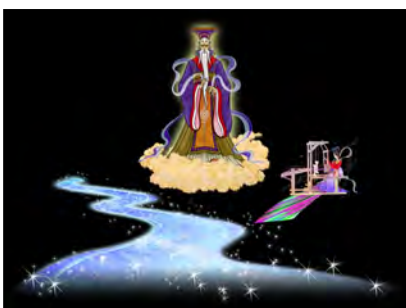
織り姫の仕事は、その名の通り、機織りをする事。

天に住む人々の着物を縫うために、織り姫は毎日毎日、機織りをしていたのです。

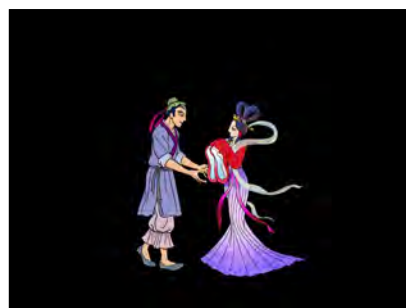


「よし、この若者なら、織り姫ともよい夫婦になれるだろう。」

天のみかどは、彦星を織り姫のお婿さんに決めたのです。



2.
そんな娘をみて、天のみかどは、ふと、こんなふうに思いました。
「これでは姫がかわいそうだ。
そうだ、いつまでもひとりでは寂しいだろうから、結婚させたらどうだろう。」



4.
織り姫と彦星は、お互いひとめで相手が気に入り、とても仲のよい夫婦になりました。



そして、早速お婿さん探し。

3.
やがて、天の川の東の岸にいる彦星という若者を見つけました。



ところが、どうでしょう。
結婚したふたりは仲がよすぎて、毎日毎日遊んでばかり。
ちっとも仕事をしなくなってしまったのです。



5. 織り姫が機織りをしないので、天の人々は着物を新しくすることができません。

彦星が世話をしないので、牛たちもえさをもらえず、やせほそってしまいました。



6. この様子を見て、困ってしまったのは天のみかど。「さて、どうしたものか・・・。」

ところが、相変わらずふたりは、来る日も来る日も遊んでばかり。これではもう限界です。



「もう一緒に暮らすことはゆるるさん！元通り、東と西に分かれて暮らすがいい！」と、ふたりを引き離してしまったのです。



天の川の東と西の向こう岸に、離れてしまったふたり。

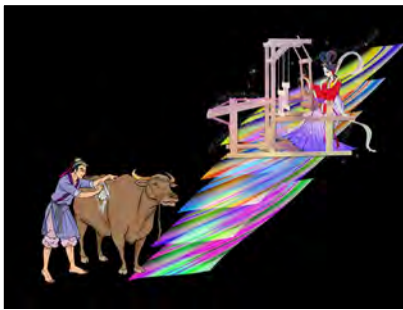


7. それからの毎日、織り姫は泣いてばかり。仕事もなかなか進みません。



そんな様子に、天の神様もさすがにかわいそうになりました。「織り姫よ、そんなに彦星が恋しいか・・・。」

それならば一年に一度、七月七日の夜にだけ、会うことを許してやろう。」



8. それからは、一年に一度会う日を楽しみに、織り姫はいっしょうけんめい、機を織るようになりました。

彦星も、せっせと牛の世話をし、牛たちも元気いっぱいです。



9. そして、待ちに待った七月七日の夜。

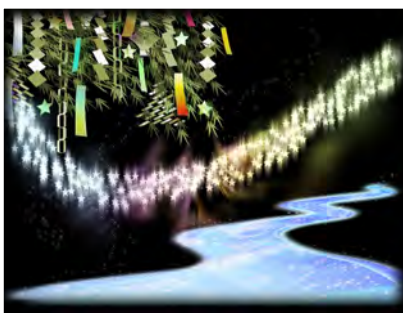
しかし、もしこの日、雨が降ると天の川の水が増えて、わたれなくなってしまいます。



そんなときは、どこからともなくたくさんのカササギが飛んできて、天の川に鳥の橋が架かり、ふたりをわたしてくれるのです。



おわり



語り：鶴 ひろみ 脚本：高島規子 イラスト：塚田洋子 編集：福留政彦